

# ホシガラス 英: Spotted Nutcracker 学: *Nucifraga caryocatactes*

## 1. 分類と形態

分類: スズメ目 カラス科

全長: 343.4±11.2mm (n=9) 自然翼長: 186.5±5.1mm (n=19)  
翼開長: 558.0±14.1mm (n=9) 尾長: 125.7±6.0mm (n=15)  
ふさ長: 41.6±0.8mm (n=17) 露出嘴峰長: 41.0±2.7mm (n=11)  
体重: 157.2±6.6g (n=18)

※ 富士山北麓の計測値(西 未発表). この計測値は、成鳥と幼鳥をわけずに集計したもの.

### 羽色:

雌雄とも体羽は濃い焦げ茶色で、頭頂から上頸を除き白色の斑点がある. 下尾筒は白色で、風切羽や尾羽は黒褐色. 尾羽の先端には白色の帯がある.



写真1. ホシガラス

### 鳴き声:

「ガーガーガー」と聞こえる声で鳴く. 「ミヤー、ミヤー」という声を発することもある.

## 2. 分布と生息環境

### 分布:

ヨーロッパから東シベリアにかけて分布する. 日本では九州、四国、本州、佐渡島、北海道に分布する.

### 生息環境:

亜高山帯から高山帯に生息するが、秋から春にかけてはより標高の低い山地帯で見られることもある. 基本的には樹林帯に生息しているが、高山帯では裸地部でもよく見られる.

## 3. 生活史



### 繁殖システム:

一夫一妻で繁殖する. 造巢、抱卵および育雛は雌雄でおこなう.

### 巢:

樹林内の常緑針葉樹の樹上に巢を作る. 巢材は針葉樹や広葉樹の枝が使われ、産座にはダケカンバやサワラの樹皮、地衣類(サルオガセ類)や蘚苔類などが使われる. 巢の直径は約40cm×約30cmで、深さは6-14cm.



写真2. 浅間連峰のホシガラスの巢.

### 卵:

一腹卵数は2~4卵. 卵は長径約35mm, 短径約21mmで、卵の地は淡青緑色で、淡緑褐色および淡青灰色の小斑点がある(清棲 1965).



写真3. 親からゴヨウマツの種子をもらうヒナ.

### 抱卵・育雛期間:

抱卵日数は17~19日, 育雛日数は21~25日(清棲 1965). 巣立ち後もしばらくは両親の世話を受ける.

## 4. 食性と採食行動

ハイマツ, ゴヨウマツ, チョウセンゴヨウなどのマツ属の種子をよく食べる. オオシラビソやコマツガなどの種子のほか、ブナ、ミズナラ、ツノハシバミなどの堅果、昆虫やクモ類も食べる. ホオノキの種子を食べていた例もある(Nechaev & Nechaev 2025). マツ属の種子を食べるときは、枝についている状態の球果の隙間から種子を取り出すとき、枝から球果を切り離し、地上や樹上で球果から種子を取り出すときがある. 前者は球果に離層ができないゴヨウマツで、後者は離層のできるハイマツでよく見られる.



写真4. ハイマツの球果をくわえるホシガラス(2014年8月撮影). この個体は初列雨覆の先端に白斑があることから、幼鳥(2014年生まれ)である.

## 5. 興味深い生態や行動, 保護上の課題

### ● 早い繁殖時期

ホシガラスの巣作りは、2月下旬から始まる. この時期の本州中部以北の亜高山帯は、積雪が1m以上もある. 普通、ヒナは5月中旬以降に巣立つ. そのためか、日本の鳥類のなかでも繁殖している巣が見つからない鳥のひとつだった. 巣の記録が現れるのは1956年4月が最初である. その後、現在までに巢内に卵またはヒナのいるものは合計5例しか知られていない. 最初の巣は北アルプスの乗鞍岳の冷泉小屋付近(清棲 1965)で見つかり、2例目は1956年5月に長野県の阿寺溪谷(水野 1956)で、3例目は1972年3月に志賀高原(河辺 1999)で見つっている. 4例目、5例目は2010年代に富士山(西・別宮 2012)と浅間連峰(西 未発表)での発見である.

多くの鳥類はヒナに与える食物が多く発生する時期に子育てをおこなうが、ホシガラスは貯食した種子をヒナに与えるため、このような制約からは解放されていると思われる. 積雪の多い時期から繁殖を開始するのは、捕食者の少ない時期、あるいは捕食者の食物要求量が低い時期に子育てを終えるためなのかもしれない. ホシガラスの産座が深いことは、低温からヒナを守るための対策であろう(産座の深さが6cmの例は、繁殖開始が他の巣よりも遅かった).

## ● 貯食行動

夏から秋に北アルプスや南アルプス、中央アルプスや八ヶ岳などの高山帯を歩くと、ホシガラスがハイマツの種子を集めている姿をよく目にする。ホシガラスはハイマツの種子を高山帯や亜高山帯に貯食する。高山帯に貯食された種子のうち、ホシガラスに利用されず、ヒメネズミにも食べられなかったものは発芽の可能性がある、それらが定着することでハイマツは更新し分布は広がる。ハイマツは種子の成熟後も球果が裂開しないため、種子による分散には誰かが種子を取り出す必要がある。ハイマツの種子散布へのホシガラスの貢献度は大きい。

富士山にはハイマツが生育していないため、富士山のホシガラスはゴヨウマツの種子を貯食している。富士山北麓のゴヨウマツの分布は、標高約2,300mの5合目付近から標高約1,100mの青木ヶ原にかけての溶岩流上に集中する傾向があり、ゴヨウマツの種子は標高の低い場所から早く成熟する。富士山北麓のホシガラスの貯食行動は8月から見られるが、この時期に種子が熟しているのは青木ヶ原だけである。5合目付近に生息しているホシガラスは、貯食期の初期には片道10.5km、標高差1280mもある距離を移動して種子を運んでいる。1回に運ぶ種子の数は、北海道では平均142粒(Hayashida 2003)、ロシアでは106-118粒(Andreev 2014)という記録がある。富士山北麓では1例であるが、2014年10月に91粒のゴヨウマツ種子を喉の袋に入れている個体が観察されている(西未発表)。

富士山北麓でおこなった貯食行動の調査では、ホシガラスは樹林内、裸地、パッチ状植物群落にゴヨウマツの種子を貯食していることがわかった。貯食期の初期には、樹林内に多く貯食する傾向がある。樹林内は林床と樹上の両方に貯食していると思われるものの、その割合は不明である。ゴヨウマツ種子をもちいた種子の追跡実験から、樹林内の林床に埋めた種子は短期間のうちにヒメネズミによって持ち去られることが明らかになった。また、林床は積雪によって貯食した種子を回収できないことが予想される。そのため、ホシガラスは林床よりも樹上に多くの種子を貯食している可能性がある。なお、その年生まれの個体も貯食行動をおこなう。富士山北麓でホシガラスの調査を開始後、ホシガラスがゴヨウマツの種子を貯食していることを直接観察で確認できたのは2年後の2011年だった。貯食物を突き止めるまでに時間がかかったのは、ホシガラ



図1. 富士山北麓の貯食行動の図(西・別宮2015をもとに作図)。8月から9月中旬は青木ヶ原。9月下旬から11月は亜高山帯でゴヨウマツの種子を採集し、亜高山帯上部に運んでいる。



写真5. 裸地にゴヨウマツの種子を貯食するホシガラス。

スが林内に入った後は姿を追えないこと、地面に貯食するときはあまり近づけないことが大きな要因である。また、傾斜のきつい森林限界では平地のように早く動けないことや、貯食行動が見られる時期は気温が低く風の強い日が多いこともあり、確認に時間がかかった。

ホシガラスは夏から秋に貯食した種子を冬季の主要な食物としており、ヒナにも与えている。ホシガラスが越冬・繁殖するためには、大量のマツ属の種子が必要になる。佐渡島や四国、九州に生息するホシガラスはおもに何を食べているのだろう。

## 6. 引用・参考文献

- Andreev A. 2014. シベリア最北東部におけるアカオカケスとホシガラスの冬の生態(訳: 藤巻裕蔵). 極東の鳥類 31:6-14.
- Bekku Sakata Y, Kurokouchi H, Matsuki Y, Nishi N & Lian C. 2019. Genetic structure of *Pinus parviflora* on Mt. Fuji in relation to the hoarding behavior of the Japanese nutcracker. *Ecosphere* 10(4):1-13.
- Cramp, S.(ed.) 1994. Handbook of the Birds of Europe the Middle East and North Africa: The Birds of the Western Palearctic Volume 8. Oxford University Press, Oxford.
- Hayashida, M. 2003. Seed dispersal of Japanese stone pine by the Eurasian Nutcracker. *Ornithol. Sci.* 2:33-40.
- 河辺久男. 1999. ホシガラスの生態. *BIRDER* 13(7):34-39.
- 清棲幸保. 1965. 増補新訂版 日本鳥類大図鑑 I. 講談社, 東京.
- 小海途銀次郎. 2024. 小海途銀次郎鳥の巣コレクション. 大阪市立自然史博物館, 大阪.
- 水野武雄. 1956. ホシガラスの巣と雛について. *野鳥* 21 (4):241-245.
- 中村登流・中村雅彦. 1995. 原色日本野鳥生態図鑑<陸鳥編>. 保育社, 大阪.
- Nechaev P. A. & Nechaev P. A. 2025. ホオノキの種子分散における鳥類の意義(訳: 藤巻裕蔵). 極東の鳥類 47:6-7.
- 西教生・別宮(坂田)有紀子. 2012. 富士山北麓亜高山帯上部でのホシガラスの繁殖記録. *富士山研究* 6:61-63.
- 西教生・別宮(坂田)有紀子. 2015. ハイマツのない富士山でゴヨウマツの種子を貯食するホシガラス. *Strix* 31:113-123.
- 西教生・別宮(坂田)有紀子. 2025. 富士山亜高山帯におけるホシガラスの貯食環境の選好性: 貯食種子をめぐる種間競合と積雪に着目して. *日鳥学誌* 74(1):79-87.
- 斉藤新一郎. 2003. 木と動物の森づくり 樹木の種子散布作戦. 八坂書房, 東京.

## 執筆者

### 西 教生(都留文科大学非常勤講師)

三重県生まれ。2017年に八ヶ岳山麓に移住。富士山北麓でのホシガラスの調査は2009年10月から始めました。その後、2016年からは乗鞍岳で、2017年からは八ヶ岳南麓も調査地になりました。2024年の秋は標高1000mほどの我が家の庭木のゴヨウマツにホシガラスが種子を集めに来て驚きました。好きな鳥はもちろんイワツバメです。

